

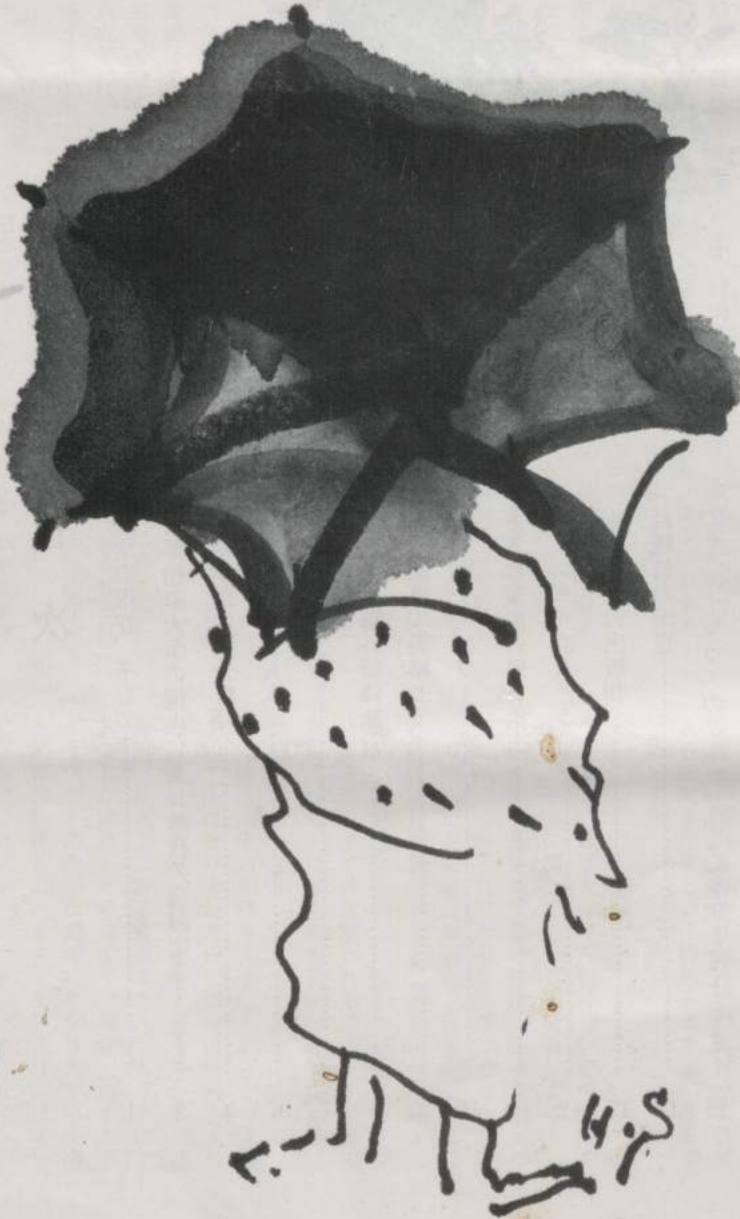
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

# 木野通信

第11号

昭和62年12月1日発行

京都精華大学 〒606 京都市左京区岩倉木野137 ☎(075)791-6131





y. Ikoma

## 目次

大学の現在、そして未来	1
京都精華大学の構内に奈良時代の窯跡	3
美術学部の新分野紹介	4
美術学部社会人入学	6
学外実習	7
アメリカ海外研修旅行	8
第四回夏の英語セミナー	9
コーヒー・アワーで英語を	10
ある卒業生の思い出	11
ラマンチャのおどう狩り	12
本学教員の出版物	13
教職員の消息	14
『ミッキーマウスのクックブック』を訳して	15
第一回ユーモア広告大賞受賞	16
卒業生の便り	17
クラブ・同好会	21
伊谷記念朽木学舎	22
丹後学舎	23
木野周辺イラストマップ	24

●表紙イラスト／斎藤 博(美術学部教授)

# 大学の現在、そして未来

### 笠原 芳光

緑濃き洛北木野の山裾をひらいて、小さな、そして自由な大学が誕生してから、来年四月にはもう二十年になります。

その間、ここで二年、あるいは四年の歳月を過ぎた人々はいま全国各地、いや海外においても、それぞれの仕事と生活に励んでおられることでしょう。そして時には青春の楽しかった、また苦しかった日々を回想することもあるでしょう。その私たちの大学の現在、そして未来についてお知らせしたいと思えます。

一九六八年に京都精華短期大学英語英文科美術科として出発したのち、一九七九年には京都精華大学美術学部、短期大学部英語英文科となり、少しずつ拡張されてきました。今年、一九八七年四月に美術学部は造形学科に洋画、日本画、立体造形、版画、陶芸を、デザイン学科にビジュアルデザイン、アーバンリビングデザイン、染織、マンガの合計九専攻を置くようになりました。なお染織は来年四月からテキスタイルデザインと名称を変えることになっています。また一九八九年には大学院美術研究科の設置を申請する予定にしています。

開学当初からおられる先生方も、その後つぎつぎにこられた先生たちも、仲よく授業

と制作に励んでおられます。また卒業生も個展を開いたり、公募展に入選したり、いろいろな賞を受ける人も多くなつてきて、美術界でも高く評価されています。教育者になった人も、企業や家庭にいる人も、美を探求する精神は、いままも旺盛であると思えます。

※ 英語英文科のほうは秘書、ガイド、国際文化などといった当初のコース制をのちに改め、二年生に専門ゼミを設け、英語を中心に人間・社会・文化、および文学・翻訳・語学の分野にわたって、さまざまな問題を追究するようになっています。ゆとりのあるカリキュラムです。自分でも勉強する人はいくらでも上達し、成長することができはるはずで、就職先でも精華の出身者はのびのびして、自分の考えを持ち、積極的であるという評判をよく聞いています。

開学当初からおられる先生は少なくなりましたが、独創的で意欲に富む先生方がつぎつぎに加つておられます。ところで英語英文科を母胎にして四年制の人文学部を発足させる計画が進んでおり、この七月に文部省に設立申請の書類を提出しました。

相手のあることです。まだわかりませんが、認可されれば、一九八九年四月から発

足することになります。日本の伝統文化と異文化の理解という二つのテーマを中心に、米国、オーストラリア、タイに海外センターを置き、国内あるいは海外での実習や実践による研究を課すという特色ある学部になるでしょう。

※ 以上はいわば大学の内容についての問題ですが、形体に関しても大きく発展しようとしています。長い間、狭い校地、小さな校舎でしたが、この三月にあらたに講義やゼミのための建物が七号館南の斜面上に完成しました。春秋に富む若者が学ぶところという意味をこめて「春秋館」という名前をつけました。淡い黄灰色のタイルに覆われた瀟洒な二階建てですが、ロビーには佐藤忠良氏の女性像が二点飾られています。

校地は西側の山林を入手したことで、面積は約二倍になりましたが、開発の許可をまつて将来、新教室、新図書館、ギャラリー、体育館、新食堂、新学生ボックス、大グラウンドなどを建設する予定です。現在、いままでもグラウンドであった場所にかなり大きい美術の実習棟を建てています。来年三月に完成し、ビジュアルとアーバンリビングのデザイン、マンガ、陶芸が引越すことになっています。



また本館の北に学生ラウンジや会議室を含む新しい研究室棟を建設中です。設計はさきの新美術棟とともに、この四月からアーバンリビングデザインを担当しておられる上田篤教授の斬新な作品です。そのためグラウンドは西のほうの仮駐車場にしていた土地を造成してしばらく使うことになっています。

※

このように内容、形体両面における大きな展開がなされつつあります。将来、学生数は約二千名になるでしょうが、これまでの小規模大学のよさは堅持したいと願っています。本学ではこれらの発展を「第二の開学」と呼んでいます。真にその名にふさわしくあるためには、開学当初の躍動するような精神的エネルギーをもう一度、いやさらに生きたいと発揮したいものです。

その精神とはいうまでもなく「自由自治」であります。岡本清一初代学長の提唱された、このスローガンは、すでに二十年にわたって本学の学風を形成してきました。そして、これは学生も教職員も卒業生も、さらに探求し、深化していくべき不滅の理念であると思えます。

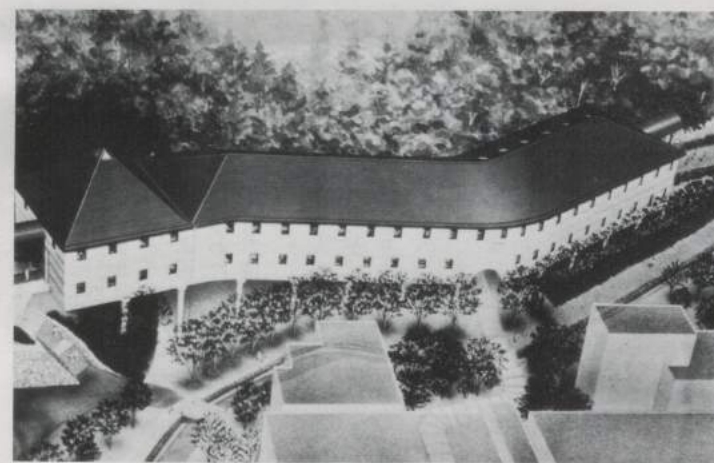
最近、大学の裏山から奈良朝前期の窯跡が発掘されました。それは京が都になるずっと以前から、このあたりに文化や芸術が存在していたことの証拠であります。

私たちの大学は文化と芸術のひろい領域にわたって古い伝統を受けつぐとともに、それをさらに新しく変革していく使命をになっているということとを、いまさらのように思ったことです。

(学長)



新美術棟(88年3月完成予定)



新研究室棟(88年3月完成予定)

# 精華大学の構内に奈良時代の窯跡

## 川崎 千足

今年の四月、精華大学に新しく版画、アーバンリビングデザイン、陶芸の三コースが開かれた事はご存知の事と思います。その為に新しい美術棟を元のグラウンドに建設中なのですが、奇しくも陶芸コースの窯設置予定場所に奈良時代の穴窯が眠っていたのです。奇しきこの縁は精華大学の陶芸の新設と、今後の発展が約束されていたように思います。

去年の十二月から、京都市埋蔵文化財研究所の手によって窯跡発掘調査が行なわれ、大学構内に奈良時代の須恵器窯二基と平安時代の灰釉窯一基が検出されました。この灰釉窯は時代は少し下りますが、専門的には大変貴重な窯で、近畿地方には無いとされていた灰釉窯ではないかと言われています。灰釉窯と言うのは、自然に灰が陶器に掛って熱に熔けて釉薬になったのではなく、人工的に製品に灰釉を下ボづけ、もしくは刷毛ぬりして製品を焼成した窯を言います。この窯は焼物の地域別発達に非常に興味があるので何んらかの方法で保存もしくは復原が出来ないものかと検討がなされています。

奈良時代前期から平安時代にかけてこの岩倉一帯はかなり大規模な窯業地であったようで何十基かの窯が煙を上げ須恵器、土師器、

瓦等が大量に生産されていたようです。精華大学の陶芸窯も来年一九八八年から本格的に焼成に入ります。





# 美術学部の新分野紹介

アーバンリビングデザイン  
専攻

上田 篤

いま、脱工業化時代を迎えて、わたしたちの環境、とりわけ都市の住環境は大きく変わろうとしています。再び、人々が都市に住む時代になるのです。それはいままでの郊外団地を大規模に集積させるようなものでなく、町の活気さのなかに人々の住まいが融けこむような新しい都市型住宅の開発を前提とするものでなければなりません。その一つ一つの住まいには人間の心の触れあいの場が用意されるのです。つまり「都市は大きな住まいであり、住まいは小さな都市である」というのが、これからの都市の住環境のめざす方向です。幸い、京都市は千年の歴史の背景に町家や町並の構造のなかに日本の住文化が深く息づいています。それらの保存と再生を含めて、人間の感性に基づく新しい都市住宅を創造する建築デザイン教育を行いたい、とわたしたちは考えています。

## 染織専攻を

テキスタイル・デザイン  
専攻に名称変更

本年度より従来の染織専攻という呼び方を改め、テキスタイル・デザイン専攻という名称に変更しました。昨今、染織の分野でも「伝統と前衛」「用と美」又、クラフトとデザイン・アート等がそれぞれお互に影響を与えあい、今迄より、多様性に富んだものに変わりつつあります。

当分野では従来より染織の素材を使って、どちらかというところアートの的な面での独創的な仕事を目標してきました。

本年度より当分野でも一層の拡充を図るに当たり、今迄より組んできた基本方針の上に立ち、それ等をさらに充実し伝統工芸からデザイン性に富む範囲までとり入れ、より幅広い創作活動を行い、広い視野からも対応出来るようにしたいと考えています。

しかしこれはあくまで従来の方向を全く変えるものではなく、これまでの方針をより拡大充実し、未来へ向っての新しい染織の可能性を積極的に追求してゆくものです。

版画専攻  
黒崎 彰

本学における版画専攻のスタートは、ニューメディア時代の現在、社会的な要請に因應する時宜にかなったものといえるであろう。というのも、今日の現代美術は新しい視覚体験こそ必要な時期を迎えており、これまでの造形手法に加え、様々な素材とテクノロジーを導入、応用し、領域を拡大することが不可欠とされているからである。

版画は版となる多くの素材や、機器技術を通して創造する表現であるから、美術の領域では今日の状況を最も理解しうるメディアとも考えられる。

それゆえ本学の版画専攻は、木版、銅版、石版、孔版など、従来の版画技法の研究、教育のみにとらわれず、広く多様な素材と手法を扱い、真に新しい美術を創造する分野をめざしている。

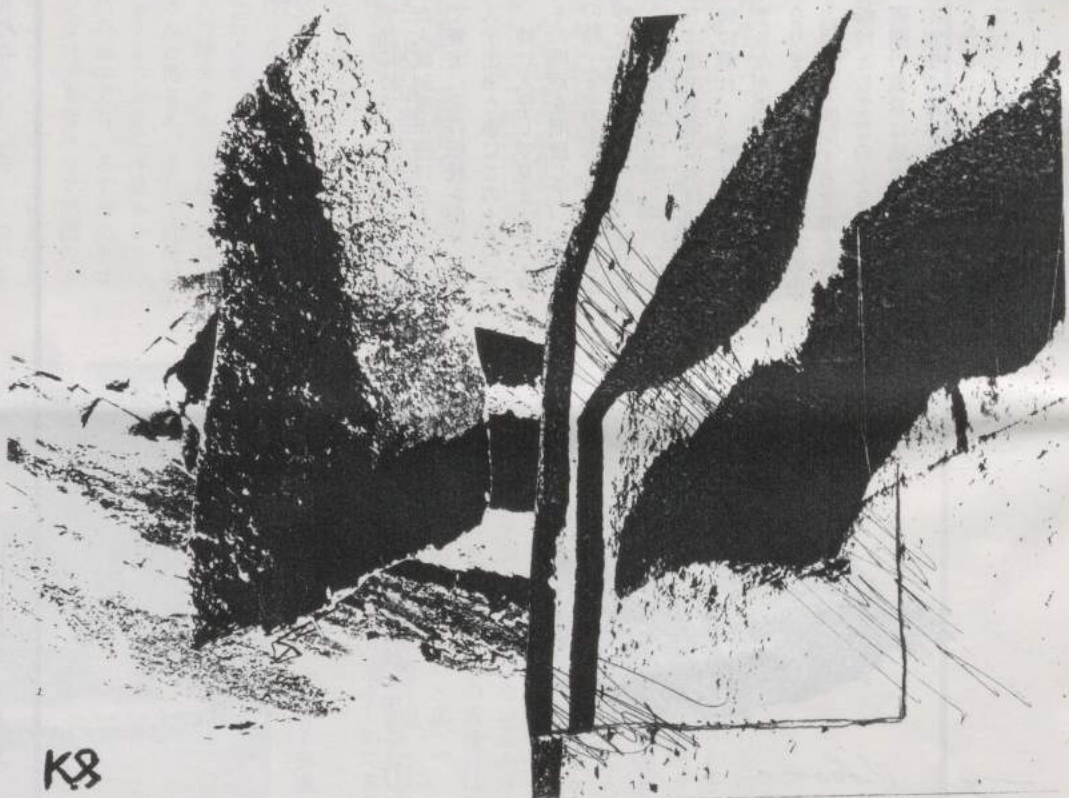
そのためには、写真、映像技術の学習や、エレクトロニクス機器による実験を行い、また多くの自然素材との接触をも計る。そして、それらの統合と造形的可能性を探求するつもりである。

陶芸専攻  
川崎千足

新しく待望の陶芸コースが出来ました。共通選択で陶芸を学び単位を修得した学生が百五十人を越え、その内本格的に陶芸に取り組んでいる人も出来、焼物による立体作品を発表している人も何人かいます。

その先輩達のおかげで、今年陶芸コースに十九名の第一期生を迎えることが出来ました。新しい校舎を、もとのグラウンドに建設中です。来春にはすばらしい校舎と設備が完成します。先輩緒兄と遊びに来て下さい。

精華の陶芸コースは従来の陶芸だけにとらわれる事なく、陶芸を今日的な物として、巾広く学んで行きたいと考えています。永い伝統に育まれて来た陶芸技法を学び、アートの素材としての土を見つめ、焼くと言う行為を巾広く体験しながら、陶芸の今日的な意味と可能性を探求して行きたいと考えています。



K8



# 美術学部社会人入学

二度目の十八才

貝田孝江

(テキスタイル・デザイン専攻)

今年の春より新しく始められました社会人入学制度により、染織科に入学を許され本物の十八才の同級生に囲まれて、二度目の青春を謳歌しています。学割定期を嬉し恥かしく朝夕使い、校内の坂や階段を息も切らさずという風に見せ、動物園通いの写生で友達から「黒くなったわね」「ゴルフですか」と言われながら二度目の十八才の学生生活を過しております。何よりもたいへんなのが体育の実技のあくる日、青春とは気持のみで、片足を上げたり、テニス、バレーボールとしごかれて、アイタタ、アイタタの連発です。でも社会人と学生生活を同時に楽しみ、いちどいち日を人の二倍三倍も、エンジョイしています。皆様も、もう一度木野通いをいかがですか。楽しいですよ。私にとって一つの難題は人一倍寒がりだという事です。木野の冬は、どうしたものでしょうか。冬眠するわけにも行かず、楽しい学生生活の中の小さな、なやみです。

大和利明

(日本画専攻)

今春本校の美術学部にて、五十才以上の社会人を対象とした入試制度が設けられ広く開かれた大学として着実にその伝統を作りつつあるこの大学に入学出来た事にこの上ない喜びを感じている。特に入学して見ますと、身障者の方々にもその門戸を開放している学校側に何となく胸の熱くなるのを覚えます。私は三十数年前郷里の大学を出ましたが、理工系で美術に全く縁の無い学部でした。そして本校に入学するまでは建設事業や木材関連の会社経営を中途で病に倒れ、一時は社会復帰も危ぶむ時もありましたが悪運強く現在に及んでいます。後になりましたが本校は洛北の山合の谷間をうまく利用して展開する立地と自然環境に恵まれ美術校としてこの上ない条件と感じています。周囲の風景は風光明媚で在学中に自由課題にて制作が許される時期が来れば出来るだけ多く作品に思いつくスケッチ等に余暇を利用して行ってみようと思います。若い皆様のファイトや先生方の制作技術を

修得して、第二の人生を力強く生きて行くべくがんばります。



y. Ikoma

## 学外実習

山名 伸生

伏見人形の窯元を  
たずねて

私は新たに本学の一員に加えていただいてから日も浅く、この学園の様子もまだまだつかめないのがあるが、中でこれほど感心したのが、「学外実習」の制度である。

一口に京都の伝統文化といっても、それを生きた形で理解するのは難しい。特にこの伝統を担っておられる職人さん達は、自分の仕事について殊更に語る訳でもないし、ましてその仕事を公開することも少ない。それだけに短期間ではありながら、私達が実際の制作の現場で、生きた伝統文化を肌身で直接感じることのできるこの制度は、真に有意義なものに思える。

さて七月にはいよいよその実習が始まる。いったい自分は数ある実習先の何処の担当になるであろうかと、期待を胸に膨ませていたところ、それは伏見人形の丹嘉さんと聞いて実に嬉しい思いをした。というのも私は以前からいささか郷土人形には愛着があったからだ。中でも伏見人形は全国に数ある土人形の

総本家のような存在なのである。深草の良質の粘土を使って稲荷大社の門前で土人形が創られ始めたのは、江戸初期のことだと考証されているが、この人形は当時商業で繁栄した伏見の港から全国へ出荷された。最盛期には五十数軒の業者があったという。それが時代の移ろいと共に、今ではその制作を続ける家も丹嘉さんと菱平さんの二軒だけになってしまった。

デザインの松谷先生の御紹介で、学生の面迫さんと杉本さん(共に染色三回生)と共に丹嘉さんへお邪魔すると、六代目大西重太郎氏には実に気さくに私達を迎えて下さった。仕事場には来年の干支の龍の人形がびっしりと並んでいる。今から作らないと注文に間に合わないのだという。それから二週間私達は大西さん御夫妻・若主人の時夫さん、型抜きの神様こと中村平八郎さんと奥さん、そして近所の奥さん達の仕事ぶりをつぶさに拝見させていただいたが、お話の途中でも、さすがに手は一刻も休むことがない。人形は全て熟練の手技だけによって生み出されていく。伏見人形はとりわけ童子物や動物ものに良いものが多い。丸々とした立体性と驚くべきデフォルメや凝人化、単純なようでいて実に効果的な色

彩の妙、そしてユーモア。美術に携わる私達にとって参考になることがいっぱいである。さらにはその人形には様々な折りの意味が込められているのだという。伏見人形が健康で親しい印象を与えるのは、こういった先人の氣持が、丹嘉の人達の粘土をおす指先から、丁寧に目鼻を描くその筆先から、一体一体の人形へ込められていくからではないだろうか。貴重な御教示をいただいた丹嘉の皆様には紙上を借りて御礼を申し上げたいと思う。

(美術学部講師)





# アメリカ海外研修旅行

北脇 徳子

短期大学部英語英文科の学生二十名、教員四名、それに卒業生二名を加えて、総勢二十六名は四週間のアメリカ海外研修旅行を終えてきた。最初の三週間、シアトルの郊外ベルヴェーに一軒の空き家を借りて根拠地とし、学生たちはそれぞれシアトルのベッドタウンであるエヴァレット、リンウッド、レイク・ステイヴンズに住むホスト・ファミリー宅にお世話になる。そして毎日往復四時間がかりで、現地のコーディネーターのカレンとバーニーの運転する二台のバンに拾ってもらってベルヴェーまでやって来る。早朝の起床と、慣れない英語社会での緊張と、帰宅してからのホスト・ファミリーへの気遣いの為、皆くたくたに疲れ、往復のバンの中は専ら睡眠の時間。それでも夢の中では、英語の洪水と必死に格闘しているのである。七月十三日シアトル・タコマ空港に到着し、カレンらの出迎えを受けて、十九日にロード・トリップに出発するまでは、皆、神経を張りつめて表情も硬く、見るもの聴くものに驚きを示す。インディアン酋長の名がそのままの名になったシアトルでは、地下に十九世紀そのままの姿で残されている街の一角を見、貧民救済の為に作られたパイオニア・スクエア・マーケット

ットで浮浪者を横目に買物をする。ベルヴェーのショッピングモールの豊かさよこのマーケットの貧しさ、高級品の冷たさと庶民の暖かさの両方に触れ、いささか複雑な心境になる。

十九日、五日間のワシントン州を巡るキャンプ旅行に出た。ワシントン州はカナダに気候も風土も似ていて、森と湖とそして雄大なコロンビア川の流れる美しい州である。奥深い森の中や、霧のたちこめる湖の畔にテントを張り、さっと走り去る野生の鹿やうさぎ、悠然と近寄って来るカナディアン・ギースに歓声をあげ、ひよっこりあいさつにやってみたらクワンツグには、キャンプファイアを囲んで、マークのギターに合わせて、皆で物語詩を捧げる。冒険好きのジニーが、岩伝いにこの海の中を歩いて行けば向こうの素敵な海岸に出られると、裸足になる。我々も負けじと海に足をつけるが、その氷のような冷たさに思わず悲鳴をあげる。「この海は危険なのよ。穏やかな水面の下には大きな渦が巻いている所があって、そこに巻き込まれて船が沈むの。でもこの冷たさでは皆すぐ死ぬわ。」ジニーの言葉に、冷たいしびれた足をさすりながら、我々は肯ずく。



キャンプ場で

ゴールド・ラッシュの時に出来た町ステイビーケンまで、シェラン湖をフェリーで往復八時間。金は見つかったものの、運送費が高すぎて、すぐに閉山の運命を辿る。往時の金鉱夫たちの夢と現実をしのばせる町である。コロンビア川には十一ものダムがあつて、周辺都市の電力を担っている。しかしこのダ

ムの為に、インディアン部落が沈み、彼らは土地を失ない、川を遡上ってくる鮭はコシクリートにぶつかり死んでいく。細いワイシユラダーが作られていて、鮭を助けようとしているが、その道を見つけれずに死ぬものも多いそうだ。人間のエゴの為に、滅び行く者がいる。アメリカの歴史の中で、その発展の為に犠牲になったインディアンたちの悲しい話を、キャンプをしている間、沢山聞いた。キャンプingtリップが序曲で、次の五日間はアメリカの民族問題と女性問題に本格的に取り組む。アメリカン・インディアン、ア

ジア系アメリカ人、黒人の、今、抱えている問題と暗い歴史、将来の展望をそれぞれ講演者を招いたり、彼らの働く場所に行ったりして学ぶのである。彼らは皆自分達の先駆者が、言葉で、人種で、住む場所で差別を受け、仕事が見つからず、そして過酷な労働で苦労したこと、この苦難を乗り越えるのには、子弟に高い教育を受けさせて、白人と同等の力をつけさせる必要があることを語る。その願いは切実である。インディアン・ホワイトペアーは、シアトルのデイスカバリーパークに施設を作り、そこで子供たちに文化活動の場を提供したり、

民族文化を後世に残そうとしていることを誇らしげに述べる。日本の「プリントン」は、アジア系アメリカ人の活動の為に大いに役に立っている。若者が体当たりの演技で、黒人もアジア系も力を合わせて生きて行こうという姿勢を見せてくれる。世界一のアメリカ合衆国で、貧しくても、少数派であっても、とにかく生きなければならぬという切迫感から来る力強い人間の生き方を我々は肌で感じ取って来た。

(英語英文科講師)

## 第四回夏の英語セミナー (1987.7.18~20)

美しい緑に囲まれた、自然豊かな六甲の地で、英語研修とレクリエーションをかねた、英語英文科主催のセミナーを今年もおこないました。今年もアメリカ、ビルマ、フィリピン、マレーシア、ノールウエー、オーストラリアからの留学生及びゲスト六名が参加し、とても楽しい三日間をすごしました。そしてセミナー終了後は二グループにわかれて、神戸でフランス料理と中華料理を堪能しました。



ビルマのお化粧を紹介する  
エイ・エイさん

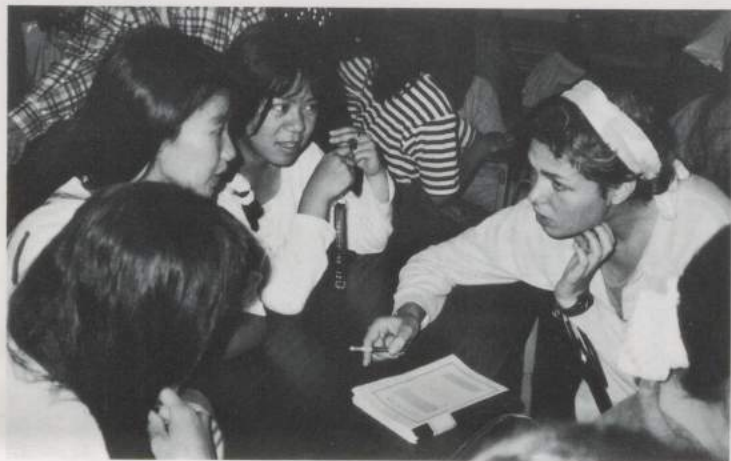
### 「セミナーに参加して」 中原早紀(英語英文科一回生)

最初はほんの旅行気分でのセミナーに参加したけれど、いろいろな国の方のいろいろなお話が聞けて大変勉強になったと思います。グループのスキット(寸劇)は何にしようかと夜遅くまで相談して、それが終るまで落ちつかなくなりました。ノールウエーのカイザさんと同室だったこともすごくよかったです。ごこない英語でしかしゃべれなかったけれど、通じるとうれしくてみんなと仲よくなれて楽しかったです。



I enjoyed this summer seminar.

話すのはまだまだだけど、聞きとることは前よりも上達したように思う。私たちと同室のビルマから来たエイさんはとてもやさしくて、興味のある話をして下さったり、私たちの部屋のメンバーだけ特別に、タナカ(ビルマのお化粧)をぬってもらったりして、日本ではできないことを体験しました。また機会があれば参加したいと思います。



洪炯圭

バンクーバーでひと夏をすごしたことのあつるテンちゃんこと杉本典子さん(英文二年)が、ものすごく刺激をうけたらしく、「先生、もっと学内で英語をしゃべりましょう」と提案してきた。この件については、かねてから呉宏明氏と相談していたことでもあったので、さっそく「英語で話すついで」を持つことにきめた。みんながお茶でも飲みながら気軽に集まれるように、名称も「コーヒー・アワー」とつけることにした。

第一回目は、今はロサンゼルスで留学中の高岡明美さんに「留学の経験から」と題して話してもらい、そのあと談笑した。二十数人が来会し、好評だった。

第二回目は、オーストラリアの女性にに来てもらい、「オーストラリアの女性問題」を語ってもらった。

第三回目は、ジェニンスさんの話をきき、質疑応答があった。毎回、学生が積極的に参加してくれたのが印象的だった。

これから先のプログラムは、できれば学生が全部自分たちで作らあげ、運営も自分たちでやればよい、というのが私の願いである。もちろん、我々がお手伝いをする事は、いうまでもない。

学内のあちこちで気軽に英語をしゃべる人がふえれば、この会の発足の意義はかなえられたことになる。(美術学部教授)



オーストラリアのゲスト(リズ・ドライブールさん)を

# ある卒業生の思い出

鶴見貞子

その人はいつも教室のうしろのほうに、ひっそりと坐っていた。時々遅刻することがあつて、そつと入室してうしろの席につく。それでなんとなく場所が定着してしまつたよくなふうだった。だが、授業の進行には集中している様子が感じられた。右手の薬指に包帯をしているので、「どうしたの?」と聞いたことがある。彼女はニコツと笑つて、「いえ、ちよつと」と答えただけだった。

そのクラスは二年の英米文学演習で、アメリカのごくふつうの人びとが自分の人生について語つたものをテキストに使つた。そして、期末のレポートは自分の周囲の誰かから聞き書きをとり、ひとつの人生のポートレートをまとめてもらうことになつていた。自分について書きたい人は、もちろんどうぞ、と書いておいたが、たぶん自叙伝は出ないだろうと思つていた。

ところがひとつ、四百字七十八枚に及ぶ自伝が提出された。読みながら、私はいつのまにか、その筆者の名を、何度も声を出して呼んでた。以下、その一部を紹介したい。

一九七五年度の推薦入学試験の二日目は、ひどい大雪だった。面接開始の時間を遅らせたり、遅刻はかまわないとしたり、いろんな

手段をとつたことを思い出す。自伝の筆者はこのときもう進めないと、タクシーを岩倉へんで降ろされ、歩いて精華に向かつたが、道にまよい、産大まで行つてしまつた。長いこと寒さの中を歩いたせいで指に血がまわらなくなり、薬指が壊死して、切断する結果になつた。私がたずねた指の包帯は、義指をかくすためのものだった。

健康な人ならばこれほどの被害を受けることはなかつたらう。その人の場合、小学校五年のときに発病した長い持病をかかえていた。「冬の寒さは私の体を悪化させる第一条件でした。」

溶血性貧血症といわれ、大学進学は無理だと医師から止められていたのを押しきつての受験だった。寒さは大敵と知りながら、途中であきらめる気にはなれなかつたのだろう。希望通り入学を果たしてからまもなく、指の切断手術を受けるが、「大学は手術した次ぎの日から行きました。……左手で字を書く練習もしました。どうしたのと聞かれるたびに、何と答えていいかわからず、下をむいてしまふ私でした。」

一年の後期、十一月のはじめから、その人は二カ月半入院する。病院から登校し、後期

の試験準備は主治医が時間をさいて見てくれた。この入院中に得た七人の病友たちとの交流を、彼女は活きいきと描いている。自分が勉強しているあいだ、気を散らせまいと、別の病室に行つてくれる同室の人の思いやり。仲よし同志でしゃべつたり笑つたりしていても、時を見はからつて「あなたは勉強しなアカンヤン」と言つて、わざと彼女を切りはなすようにしながら、あたたかく見まもり、はげましてくる患者の人びとの姿が浮かんでくる。

この文章を書くにあつて、記憶をたしかめるために、古い成績原簿をしらべてみた。教職課程もとっている。この人にとって、教育実習は体にこたえたにちがいない。そして、全教科の三分の二以上ならんでいるA。精華に入つてからの入院で、彼女は幼い頃から自分を苦しめてきた病気の正体を知らされていた。「病名は全身性エリトマトーデス、いわゆるこうげん病でした。……この病気は、もう一生治るものではないらしく、目の悪い人がずつと眼鏡をかけているように、お薬を毎日のまなければならぬことでした。」山にも海にも行けず、旅行もできない限られた生活を強いられるなかで、この人はその



代償として、ひとつひとつのクラスに自分をうちこんでいたのだらう。「今回の入院で多くの若い人を見てきて、若い人でも病気で悩んでいる人はいっぱいいると思うと、今まで自分だけが不幸だと考えていたことがはずかしくなりました。病気のため、自分の事しか考えられなかった自分がとてもいやに思えました。……限られた小さなわくの中でせいいっぱい生活する、それが生を与えられた私の、せめてもの神への恩返しだと思わな

ければいけない、そう自分自身にいきかせているのです。」卒業して六年後の一九八三年、この人はなくなくなった。最後に会ったときは入院中で、枕のわきに置いた分厚い外国小説の翻訳書に手をかけたまま眠っていた。そっと部屋を出ようとする、ぱつと目をさまして、向こうから声をかけてきた。「先生の本です。」それは、私の訳したディネーセン著『復讐には天使の優しさを』だった。

在学中、この人が病気や指の障害のことを話そうとしなかったのは、健康な者に対する病者のいたわりだったのだと、今になって思いあたる。長い病気は彼女を強い人にしたえあけ、同時に独特な優しさの持主にした。この人を知っていた者たちのなかに、彼女はそういう忘れがたい人間像を残してくれた。

(英語英文科教授)

# ラマンチャのびびり狩り

生駒 泰充

スペインで二年間程暮した中で、最もスペイン人の考え方や行動がよくわかるような話を一つ書くことにする。

ドンキホーテの舞台になったラマンチャ地方の小さな町へスケッチに行き、マドリッドへ帰るときのことである。まず、列車の駅へ行ってみると、当然のように定刻になっても列車が来ない。駅員に尋ねると、「そのうち列車が来るから、それに乗ればいつかはマドリッドに着くさ、心配しなさんな、マドリッドは逃げやしない。」という返事である。四十分程遅れて列車が来たのでそれに乗り込むと、一時間程走ったと思ったら、突然荒野のまん中で停まってしまう。地平線まで何も無い。

かろうじて、停まった列車の周囲にぶどう畑があるくらいである。別に事情を説明する車内放送もないが、乗客はのんびりおしゃべりしている。そのうち車掌さんが、ブラブラ散歩するように通路を歩いてくるので、なぜ停まっているのか尋ねると、「列車が動かなくなったから停まっているんだよ。」という明快な返事が返ってくる。あまりに明快すぎて日本人にはよくわからない。キョトンとしてしまう。じゃあ、いつ動くのかと尋ねると、「修理が済めば動くだらう。それが、いつかなんて、修理してみなきゃわからないだろ。そう思わないかね？」と答えてニココリ、ウインクしている。日本人は大抵、「どこことが故

障して、修理にどのぐらいの時間を要し、マドリッド到着は何時何分の見込みである。」というような答えを予想しているもので、さっきのような答え方をされると、あまりに哲学的に思え、つい、禅問答をしているような錯覚に陥る。そして、つい、愚問をしたような気がになり、誰かれなしにあやまりたくなる程、恐縮してしまうのである。

そのうち、乗客の一人が、のこのこと降りていき、ぶどうをもいでは食べ始め、他の乗客に向かって大声で「このぶどうは、おいしいぞ。」と叫ぶのが聞こえてくる。それを合図のように乗客は次々に降りていき、みんな勝手気ままにぶどう狩りを始めた。私も、気

がつけばいつの間にか一緒になってぶどう狩りをしている。両手がぶどうで一杯になると、それぞれ木蔭へ行つてワイワイしゃべりながら食べ始めるのである。中には、ワインをまわし飲みして、宴会さながらに盛り上がりつつある一団もいる。そういう状況だけ見ていると、まさか荒野のまん中で立ち往生している列車の乗客とは思えない。まるでピクニックのようである。そのうち二時間程すると、乗客が、ポチポチと列車に戻り始めた。ほぼ全員乗ったところで、何の前ぶれもなしに、列

車動き出す。乗客を見ると、それぞれ、やや顔を紅潮させていたりして、いかにも楽しそうである。中には、「列車が停まった御蔭で、ぶどう狩りが出来てよかったわい。」などと言っているおじいさんもいる。列車が遅れたことについて不平を言っている人など誰もいない。ましてや払い戻しがどうのこうのなど誰も言わない。なんて大らかに、そして自然に運命を受け入れる人達なのだろう。ケセラセラはスペイン語で、なるようになるさというような意味であるが、まさしくそういう

国民なのだを納得してしまう。時計を見てイライラしながら煙草でも喫いながら列車が動くのを待つ国民もいれば、その場で、新しい楽しみを見つけて、災いさえ福に転じさせて人生の彩りとしてしまう国民もいる。出来れば後者のような生き方をしたいと思う。「明日は明日の風が吹く。」というのは真実だと思う。せめて、あさつての方向性だけは見失わずに、明日は明日の風に吹かれてみたい。

(美術学部講師)

# 本学教員の出版物

(氏名・書名・出版社・定価・備考の順、一九八六年四月以降)

荒岡興太郎「EC——欧州統合の現在」創元社、二、〇〇〇円(共著)

笠原芳光「宗教再考」教文館、二、〇〇〇円

クントン・インタラタイ「日本人はアジア人か」学生社、一、二〇〇円

小林陸一郎「SCULPTURE(スカルプチャー)」「スベシヤル・デザイン・コンサルタント」、六、五〇〇円(グループQとして)

佐川美代太郎「ぼつんこかっぱ」こぐま社、一、二〇〇円

鶴見貞子「ハクスリーの教育論」人文書院、一、五〇〇円(A・ハクスリー著、横山貞子の訳者名で)

同「からだの声をすまずと——よみ

がえる女の知恵」思想の科学社、二四〇〇円(S・デメトラコポウロス著、横山貞子の訳者名で)

野上芳彦「福祉がだんだん見えてきた」青也書店、一、二〇〇円

同「チャレンジ高齢化社会」ミネルヴァ書房、一、二〇〇円

同「老人へのボランティア活動」福村出版、一、二〇〇円(編著)

同「青年心理学」ナカニシヤ出版、二、〇〇〇円(共著)

同「わが人生論——青少年に贈る言葉」文教図書出版、五、〇〇〇円(共著)

原田弘「ペーシック先生の発信型英語術」リ

ック出版、二、〇〇〇円(共著、上下二巻)

洪炯圭「朝鮮語大辞典」角川書店、三、〇〇〇円(校閲、全二冊)

同「在日韓国・朝鮮人の現状と将来」社会評論社、二、八〇〇円(共著)

日高六郎「The Price of Affluence: Dilemmas of Contemporary Japan, Australia, Penguin」戦後思想を考える(岩波新書)の英訳版。

同「戦後日本を考える」筑摩書房、一、八〇〇円(編著)

同「現代日本を考える」筑摩書房、一、六〇〇円(編著)



# 教職員の消息

- S 55・3・31付退職
- 吉田一雄氏(71) 英語英文科教授
- 京都市山科区安米馬場西町28
- S 58・3・31付退職
- イーデス・シフアト氏(67) 英語英文科教授
- 京都市左京区北白川山ノ元町60杉本方
- S 58・4・1付採用
- 矢ヶ崎庄司氏(51) 英語英文科教授
- 堤 邦彦(30) 一般教育助教授
- S 58・4・30付退職
- 禪野誠之助氏(50) 事務職員
- 京都市左京区岩倉上蔵町12-5
- S 58・10・31付退職
- 山岸清照氏(74) 用務員
- S 59・3・31付退職
- 由里 明氏(72) 洋画教授
- (S 59年4月28日逝去されました)
- 遠藤幸孝氏(52) 一般教育教授
- 吉村正郎氏(37) 染織講師
- 大阪市城東区鴨野西1丁目12-9
- S 59・4・1付採用
- 小椋純一氏(29) 一般教育助教授
- 中島勝住氏(32)
- 梶川よ志子氏(36) 英語英文科講師
- 上々手良夫氏(29) 事務職員(施設)
- S 59・4・1付採用
- 黒川清志氏(25) 事務職員(経理)
- S 60・3・31付退職
- 大江のぶ氏(66) 寮母

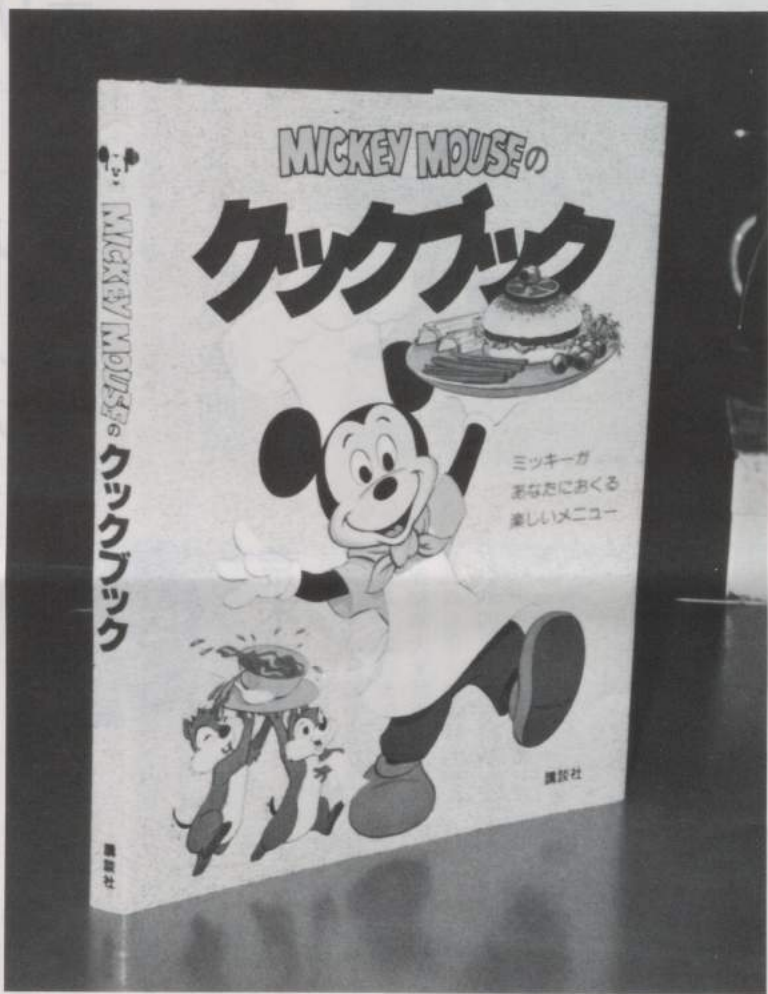
- 京都市左京区一乗寺北大丸町62
- S 60・4・1付採用
- 佐川晃司氏(29) 洋画講師
- S 61・3・31付退職
- 渡辺克己氏(78) 用務員
- (S 62年3月28日逝去されました)
- S 61・4・1付採用
- 原田 弘氏(34) 英語英文科講師
- 栗巢 満氏(29) 保健体育
- S 61・5・31付退職
- 福井 勇氏(77) 洋画教授
- 亀岡市曾我部町穴太57
- S 62・3・31付退職、名誉教授を授与
- 佐波悠紀氏(42) 図書館職員
- 京都市北区賀茂岩ヶ垣内町29藤井マンション15号
- S 62・4・1付採用
- 黒崎 彰氏(50) 版画教授
- 上田 篤氏(56) ULD教授
- 川崎千足氏(49) 陶芸教授
- 生駒泰充氏(31) 洋画講師
- 山名伸生氏(29) 一般教育講師
- 北脇徳子氏(38) 英語英文科講師
- S 62・10-1 S 63・9まで
- 交換教授として本学美術学部教授、片桐護氏をアメリカ・アンティオーク大学へ。アンティオーク大学教授、ハロルド・ライト氏、本学へ。



## 『ミッキーマウスのクックブック』を訳して

河原哲夫(英語英文科一九八一年卒)

私は79E107という学籍No.を頂いて2年間精華で学生生活を満喫しておりました。卒業して6年の月日があっという間に流れ、もう20代も後半に突入しましたが、私にとっては生涯忘れられないこととして、1年の時の授業(呉クラスの講読)で「ミッキーマウスのクックブック」というアメリカの子供向けの絵本の翻訳をしたこと、があります。訳したものを文集にすること、で頁数を分担して2人ずつで取り組み、それらを編集して製本といった工程で、最後までいろんな形で呉先生の手伝いをさせて頂き、完成させた時には感無量であったと今でも昨日のこのように思い出すことが可能です。その文集が講談社から本となって世の中に出た時は何か不思議な気がしましたが、京都の山奥の小さな大学でとてもいい経験をする事が出来ました。



『ミッキーマウスのクックブック』  
京都精華大学短期大学部英語英文科 1979年度1年  
講読呉クラス訳(講談社1984) 1,500円



# 第二回ユーモア広告大賞受賞

一九八七年、読売新聞社主催

漫画・イラスト／優秀賞（三井信託銀行）



荒木成実

京都市左京区岩倉忠在地町二二二の二狩野ますや荘

京都精華大学美術学部

一九六五年 兵庫県生まれ

一九八四年

京都精華大学入学

美術学部デザイン科ヴィジュアル

ルデザイン専攻

## 受賞のことば

今回の読売ユーモア広告大賞で、私自身初のタイトルと呼ぶべき賞を頂き、感無量であります。日ごろは美術大学でデザインを学ぶ、京都精華大学の4回生なのですが、これをきっかけに、京都精華大学の校名をもっと全国のみなさんに知って頂きたいと思っております。また、私自身も、より大きな賞を目指して、これからも努力していく所存であります。

## 卒業生の便り

### お元気ですか？

第二回卒業生の皆様、お元気ですか？  
早いもので卒業してから十六年が過ぎてしまいました。その間、就職、結婚、子育てと忙がしく、ふと振り返るともう三十路半ばに  
来ています。子供ももう手がからなくなっ  
た今、無駄に時は過ぎしたくない、身につく  
事は何でも吸収したいと、そんな思いにから  
れ、色々と挑戦しています。

こんなところは、昔と変わっていないと思  
いますが、自分を豊かにし、家族を大切に思  
い  
そして、人の為でなく、自分の生き方を大事  
にしたいものだと思うこの頃です。思い通り  
に行くかどうかは……。

でも、頑張ってます！！

金澤秀子（旧姓杉本）

美術科デザイン専攻（松味ゼミ）

一九七一年卒

### 雑感

精華を卒業して、10年以上が過ぎた。当時  
四年制大学の準備が進められ、最終段階であ

ったと思う。自由な校風の中で、毎日制作に  
ぼつとっとしていたことを思い出す、この間、  
朽木セミナーハウスによってみた。まだ、大  
学が自分の身近な所にあることをはだで感じ  
る。

今、就職、結婚、子供、と平凡な日々であ  
る。創作は、ハングリーでなくてはと、あら  
ためて思う、おもいきって、生れ故郷にアト  
リエを建てた。卒業して十年である。まだ制  
作することを忘れていない自分をみつける。  
35才、再び創作活動に入る。

小多譲仁（美術科デザイン専攻、

一九七五年卒）

### ポーランドで初の漫画展

私は一コマ漫画を仕事にしています。  
東京へ出て七年目、自分自身で少しづつ漫画  
家として根づいて来た、実感しています。  
去年のちょうど今頃、社団法人日本漫画家  
協会主催の海外初の漫画展「現代日本漫画展  
INポーランド」に出品、現地でのオーブ  
ニングパーティーに出席する為に日本の漫画家  
の代表（総勢十五名）としてポーランドへ行



ポーランド国立漫画美術館館長  
リピンスキー氏と

っていました。  
ポーランドには国立漫画美術館があり、漫  
画家は、漫画家であるということが文化人だ  
あり、それを誇りにしていました。  
彼らは、政治的には抑えられていますが、  
社会的、文化的には日本人の私達よりも、恵  
まれていて感じました。

私は、マンガート（マンガ+アートという  
意味で、私達若手漫画家十二名程で造った新  
語）というグループを結成して、毎年一回、  
二回マンガート展を開いています。  
TVや新聞にも取り上げられ、着実な発展  
を遂げています。

これからは、国内国外を問わず、確固たる  
地盤を築いて行きたいと思っています。

笠松 洋（美術学部マンガ専攻、

一九八一年卒）



## 朽木風景

暇さえあれば車で朽木まで走った。何も無いと言えばそれまでだが何か心落着く。することと言えば決まっているのを飲んで酒を飲む。

夏でも冷たい川、お化け話、肝だめし、曇りのない星空、朽木犬、台風のごしや降りの中でも十何人かで朽木までたどり着いたこと。何もかもが酒の肴になった。

卒業後も何度か訪ねた。訪れるたびに第二、第三の故郷に来たような感慨にひたる。暇さえあれば何度でも訪ねてみたい。

鈴木憲治（美術学部洋画専攻、一九八四年卒）



富士山3,500m 地点

## 吉田寮

皆さん、こんにちは。わたくしこと、古城和子は本校第一期生で、当時は短大・男女共学、そして、意欲満々の諸先生方と未来輝ける他の大学と異なった独自の教育方針とに魅せられて山口県より上京いたしました。

京都という場所にも憧れごと、又どんな人達とめぐりあって自分の二年間の人生が待っているのだからとワクワクした気持ちで入学時の頃はまだ真新しくよみがえってききます。京大の近くの吉田寮での生活も、私には、忘れられない貴重な思い出です。

吉田寮で一緒だった尾道の章子さんや金沢出身の方、各県から集まったお友だち、お元氣でしょうか。この号をお借りしまして、ぜひ一度同窓会を京都で、開くことができたらどんなに幸せでしょうというのを言いたい。思いかえせば十七年間はあつというまにすぎさつて、でも心はいつまでもその当時のままの自分だと自負しております。

中学三年の娘もまた、三年もすれば大学生になると思えば感無量です。

私は英文科を選びましたが、娘はどうも英語が好きではないようですので、違うコースをたどりそうですが、彼女もまた自分の夢にむかってまっ直ぐ、はばたいてくれることを期待し、その道で生かせるコースを選びたい。なかなか今日では、英文科に進んだものの全く違った事務関係の仕事につかなくてはならない、その道を生かさない人が多いこの頃です。後輩の皆さん、ぜひ目的にむかって精進して下さい。

古城和子（英語英文科一期生、一九七〇年卒）

## 航空管制官として

前略

精華を卒業のみなきま方お元氣でしょうか？ 僕は昭和四十七年に精華の短期大学部、英文科に入学しました「山地」という者です。何しろ十年、一昔と言いますが、十五年も前の事になってしまいました。そして京都も学生時代と共に少しづつ遠い存在になっています。ただ一言、懐かしいのです。

ところで僕は卒業してから、昭和五十年か



## 青年の翼



マレーシアのジョホールにて

87年夏、国際交流を目的とした「青年の翼」に参加し、チャング国際空港に降り立った。さつそく現地の青年達の出迎えを受ける。シンガポールには中国人が過半数を占め、続いてマレー人、インド人という人種構成ということもあり、全員が中国人で、最低でも英語と中国語を使い分けている。さらにマレー語タミール語と多様である。

市街に入つてまず驚いたのは、近代的な公団住宅の多さである。参考までに、5DKで約三〇〇万円というから、日本の比ではない。つい、「こちらで家を買って住んじゃおうか!」と思つてしまう。また、ゴミの投げ捨ては罰金というだけあって、街の中はとてよよく整備されている。現在、地下鉄の工事中で、完成は3年後らしい。

5日間の日程の中で、現地青年・人民協会との交流、日本企業の視察等の公的訪問の合

ら航空管制官の研修を受け、現在は大阪空港でこの仕事をしています。英語はそれなりに役立っております。

ところでパートⅡ、苦節三十三年、今やつと婚約中（写真の女の子、何？、はやくも子供が？、↑これは彼女の姉さんの子供ですヨ。）いろんな事がありましたけど、今、何となく毎日楽しいです。この「木野通信」刊行の頃は、ハワイへハネムーンじゃウツシッシ。ところでパートⅢ、在学当時の人達に再会する機会があればなあーと思つています。とりあえずみなさん、元氣で！

山地文雄（英語英文科、一九七四年卒）

## 子育てに明け暮れ

拝啓

残暑厳しい毎日ですが、皆様お元氣のことと存じます。封書を頂き、懐かしく思いました。卒業して、短大だったのが、大学になったと、お聞きして、うれしく思っていました。五十二年に、卒業してはや、十年が過ぎ、私も、二児の母となり、学業からも、友人からも遠のいていますが、それを機会に、連絡を取つたり、同窓会を開いたりしたいと思つています。名簿を作つて、頂ければ有難いです。

私は、商家に嫁つぎ、毎日忙がしく仕事を手伝つたり、子育てに明け暮れる日々を送つています。学生時代の、のんびりしたあの頃が、今でも最高に良かったなあーとつくづく思います。学生の方、四年間充分に学業に青春にハッスルして下さい。時は、戻つてはこないから……。

## 少しの反乱

お元氣ですか。

あれから、十年の月日が過ぎ、私は三十歳になってしまいました。三十です。驚いたことに。

この十年の間に、私を取り巻く環境は、種々様々に変化しました。就職、結婚、出産と普通、女性が経験する大半の事を済ませ、当然、外観はシミやシワが増え、子育てに追われる専業主婦そのものです。人から見ると、とても落ち着いた暮らしぶりなのですが、どこい、内に秘めた企みがあつて、まだまだ内面的には、十年前と少しも変化していません。

十年前の私、そう、氣負い、突っ張つていないと、自分の若さに翻弄され、潰されそうな気がして、肩をギンギンに怒らせていた。今、思い返すと、かなり氣恥ずかしいのですが、後三年もしたら、また少し氣負つてみようかと、性懲りもなく思つています。平凡という大きな枠の中での、少しの反乱。それが、他人の目を通した時、生き生きとした「おとなの女」として映つたら、素敵だと思ひます。

それでは、時節から御愛下下さいますよう。

伊藤満留美（旧姓遠山）（英語英文科、一九七八年卒）



間をぬっての市内観光と精力的に駆け回った。また、連日夜の自主研修に参加し、まさにハードではあるが、多くの人達と接し、この国を膚で感じる事ができ、実り多い旅であったと思う。そして、若者は国を越えて、共有できる物があると、改めて実感した。

澤田千恵子

(英語英文科、一九七九年卒)

## 坂道のキャンパス

精華大学を卒業してはや五年。あれよ、あれよという間に時間が経ってしまいました。今、私は、ふる里徳島に帰り、学生の頃は無縁の毎日を送っております。

今回、「木野通信」が、再刊行されるという事で、脳裏から次第に薄れていく坂道の続くキャンパス、授業風景が目の前に甦えり、同期のみんなを本当になつかしく思いました。卒業生のみならず、あの頃のように、ゆっくりと話ができる機会をいつか必ず持ちましょう。その日を楽しみにしています。

中村高子 (英語英文科、一九八二年卒、専攻科、一九八三年卒)

## 一瞬を大切に

Saying: Don't count your chickens before they are hatched.

この諺を私は転職という形で実感しました。転職して二ヶ月ですが、ここまでくるのに本当に悩み、勇気がいりました。実現するとは

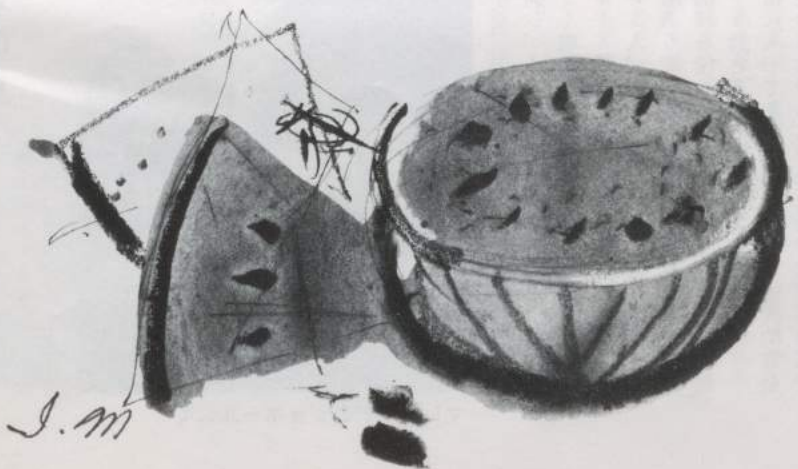


向って一番右、職場の送別会にて

思っていなかっただけに、この事は大きく私の人生を変えました。葛藤の中で学んだ事は今をこの一瞬を大切に生きる事。あまり先の事は言ってもしょうがないという事。一分一秒真剣に生きていたら、きっと素晴らしい道が開けると信じています。頑張ります。

友寄清乃

(英語英文科、一九八五年卒)



# クラブ・同好会

### 学園祭を中心に多彩な活動を

現在、学友会に所属するクラブ・同好会は十五団体で、数のうえからいえば、必ずしも多くはありません。しかし、個人レベルの立案によって新たな同好会が発足し、夏秋二度の学園祭を中心に多彩な活動がくりひろげられるというのは、精華ならではの特色といえるでしょう。数年前に登場した茶道部やビデオ同好会、劇団をはじめ、今日も木野谷のどこかで趣味を愛する人達の集団が生まれ、コミュニケーションの輪をひろげようとしています。

これら新入の同好会とともに、開学以来の運動部・音楽系クラブの活動も近年一段と盛り上がりを見せ、居並ぶ強豪相手の対外試合や、ライブハウスへの進出が目立っています。また学内では、マスコミ研究会による学内情報誌の発刊など衆目をあつめる話題がありました。

ここで、本年度入学案内のクラブ紹介欄より、各団体の近況をぬき出してみましよう。

#### 軽音楽部 (部員70名)

ロックが中心。ジャンルは問いません。学内外でコンサートを行ない皆さんに楽しんで

もらいたいと考えています。

#### フォークソング部 (部員50名)

各人が好きなようにバンドを組み年五回のコンサートに出演します。夏に合宿あり。一年々らいでほとんどの人が楽器をマスターしています。ジャンルはフォーク・ブルース、ロックなどいろいろです。

#### 軟式野球部 (部員19名)

本場に野球の好きな者同士が楽しくやっています。練習は週三回で、短時間のうちに充実した練習をするよう心がけています。春と秋にリーグ戦あり。部員には野球の初心者も少なくありません。

#### 女子野球部 (部員10名)

何といっても楽しく気楽にやろうというのが私達のテーマであり、各人の個性がものをいうクラブです。ソフトボールたちも私達に投げてもらおうことを喜んでいきます。

#### 剣道部 (部員15名)

年二回の昇段試験を目標に毎週三回一時間半ほどの練習をしています。初心者の方でも

親切に指導します。

#### 軟式テニス部 (部員15名)

初心者の人も入ってくるので、テニスを体験することを目的として楽しく活動しています。テニスの楽しさ難しさを皆さんでいっしょに学ぶクラブです。

#### ワンダーフォーゲル部 (部員12名)

身近な山々でのハイキングをはじめ、夏にはアルプスでの合宿、秋山、雪上ハイキングなど、四季を通じて幅広い活動をしています。とにかく「楽しく登る」が信条です。

#### バスケットボール部 (部員29名)

仲間の交流を深め、友達の輪を広げます。楽しく、そして時にはきびしく練習して行きたいと考えています。

#### バレーボール部 (部員28名)

春・秋のリーグ戦やその他の対外試合に向けて週四回練習します。夏合宿を行ったり、大学祭で模擬店を出すなど、学生生活を一層充実させてくれるクラブです。



マスコミ研究会 (部員9名)  
年四回発行予定のミニコミ制作を行ないま  
す。また学外からの発注にも応じ、「明るい  
明日を目指して猛進」するをモットーに精華  
大生を啓蒙しつつづけています。

ボランティアクラブ (部員10名)  
おもに福祉関係のことに携わっていますが、  
あくまでも学生であり、学業が主体なので、  
自分の空き時間を利用して子供や独居老人に  
接し、福祉への協力とふれあいをよびかける  
活動をしています。

## 伊谷記念朽木学舎



ラグビー・フットボールクラブ (部員27名)  
大学に入ってからメリハリのない生活習  
慣をなくすべく、毎日の昼休みを利用して練  
習しています。年間を通じて10〜12試合程度  
の交流ゲームとコンパをします。「授業にさ  
しわりなく、しかしホットに」がモットー  
です。初心者ばかりですが、充分にラグビー  
をエンジョイしています。  
(堤 邦彦・美術学部助教授)

本学美術科初代主任教授の故伊谷賢三先生  
の御遺志を生かして、一九七五年六月に開設  
の滋賀県高島郡朽木村古屋にあるセミナー・  
ハウス。京都、滋賀、福井の3府県境に近く、  
静かな自然環境を存分に満喫することができ  
る。京都市内からは車で約一時間半。利用料  
金は本学関係者で一泊二〇〇円。自炊制。  
毎年、学生のクラブやゼミの合宿等に利用  
されている。30名まで宿泊可。

交通  
京都からは国道307号線を、大原、花折峠を  
経て、梅ノ木から安曇川支流をさかのぼる。  
車で一時間半。

## 丹後学舎



丹後半島の先端、経ヶ岬の近く「丹後松島」  
と呼ばれる景勝の地に一九八五年七月より開  
設されたセミナー・ハウス。教育後援会の寄  
贈によるものである。  
日本海に面し、海水浴、釣り等、特に夏の  
レクリエーションに最適。

京都市内から車で約4時間。利用料金は本  
学関係者で一泊七〇〇円。自炊制。七月八月  
の夏休み中は特に学生のグループの利用が多  
い。  
宿泊は五〇名まで可。  
※申込み、問い合わせは学生課まで。

交通  
京都から国道9号線、福知山から176号線に  
入り、野田川、峰山を経ていく。車で約3時  
間半。国鉄利用の場合は、国鉄宮津線「峰山」  
下車。丹後海陸交通バスで50分。「上野」下車。

### ●第一回卒業生(英語英文科)の 同窓生集まる

本年度、大学祭の初日(十一月一日)  
第一回卒業生が集り、岡本元学長、笠原  
学長その他の教職員と共に楽しい思い出  
の一時を過ごした。二〇年ぶりにもかか  
わらず20名近くが参加し、なかなかの盛  
況であった。  
この会合は京都精華大学に同窓会を作  
る動きの一環として開かれたものである。  
全卒業生のご協力をお願いします。

### 茶道同好会 (部員16名)

お茶(お菓子)好きの人達が集まって楽し  
くお稽古をします。コンパはもちろん、春と  
秋のお茶会、夏合宿などを行ない、大学祭で  
はお店をやりながらお茶の心と遊び心を学ぶ  
サークルです。セミナー館三階の和室で週一  
回練習を行なっています。



### ●編集後記

卒業生の多くから今の大学の様子や移り変  
わりなどをよくたずねられることがある。そ  
れに答えるべく、この度「木野通信」が久し  
ぶりに再刊されて本当にうれしい。

今回は教職員及び卒業生の記事が早々と集  
り、盛りだくさんのニュースレターとなった。  
心よく記事及びカットの依頼に応じて下さっ  
た方々にお礼を申しあげたい。来年もひきつ  
づき発行できることを望んでいる。

精華大学も来年で創設二〇年をむかえるが、  
卒業生も総数約一万人にのぼると思われる。

これを機に同窓会の結成及び卒業生名簿の作  
成を是非実現させたい。これに関しては、ま  
だスタートの段階であるが、今後卒業生の皆  
さんの多大な御協力を切に祈るばかりである。  
(K・G)

来年二〇周年を迎えることになる。今回の  
刊行にあたり、何人かの卒業生のみなさんに  
原稿を依頼すべく、初年度から名簿を操って  
みたのだが、年度が新しくなるにつれて馴染  
みのひとが少なくなる。

学生数の増加や自らの老化という事情もあ  
ろう。外側の社会の変化ということもある。  
が、そういった理由よりも、内側で「なにか」  
が見失なわれたのではないか、その危惧の念  
がある。

将来に向けていろいろなプランが進行中で  
あるが、根本的な「なにか」をさがしださな  
ければ画竜点睛を欠くことになるのではない  
か。卒業生のみなさんの知恵や協力を心から  
望む次第です。(S・M)



# 木野周辺イラストマップ



磯巖正之・見原克典・寺田勝一 (マンガ専攻2年)



Photo 盧承鉉



# 京都精華大学

Kyoto Seika University

〒606 京都市左京区岩倉木野町137 TEL (075)791-6131(代) FAX (075)722-0838